詩集

芥川龍之介

青空文庫

彼の詩集の本屋に出たのは三年ばかり前のことだつた。彼はその仮綴ぢの処女詩集に『夢みつつ』と言ふ名前をつけた。それは巻頭の抒情詩の名前を詩集の名前に用ひたものだつた。

夢みつつ、夢みつつ、
日もすがら、夢みつつ……

彼はこの詩の一節ごとにかう言ふリフレエンを用ひてゐた。

彼の詩集は何冊も本屋の店に並んでゐた。が、誰も買ふものはなかつた。誰も？ ——いや、必しも「誰も」ではない。彼の詩集は一二冊神田の古本屋にも並んでゐた。しかし「定価一円」と言ふ奥附のあるのにも関らず、古本屋の値段は三十銭乃至二十五銭だつた。

一年ばかりたつた後、彼の詩集は新らしいまま、銀座の露店に並ぶやうになつた。今度は「引ナシ三十銭」だつた。行人は時々紙表紙をあけ、巻頭の抒情詩に目を通した。（彼の詩集は幸か不幸か紙の切つてない装幀だつた。）けれども滅多に売れたことはなかつた。そのうちにだんだん紙も古び、仮綴ぢの背中もいたんで行つた。

夢みつつ、夢みつつ、
日もすがら、夢みつつ……

三年ばかりたつた後、汽車は薄煙を残しながら、九百八十六部の「夢みつつ」を北海道へ運んで行つた。

九百八十六部の「夢みつつ」は札幌の或物置小屋の砂埃の中に積み上げてあつた。が、それは暫くだつた。彼の詩集は女たちの手に無数の紙袋に変り出した。紙袋は彼の抒情詩を横だの逆様だのに印刷してゐた。

夢みつつ、夢みつつ、
日もすがら、夢みつつ……
半月ばかりたつた後、是等の紙袋は点々と林檎畠の葉かげにかかり出した。それからもう何日になることであらう。林檎畠を綴つた無数の林檎は今は是等の紙袋の中に、——紙袋を透かした日の光の中におのづから甘みを加へてゐる、青あをとかすかに匂ひながら。

夢みつつ、夢みつつ、
日もすがら、夢みつつ……

（大正十四年四月）

青空文庫情報

底本：「筑摩全集類聚　芥川龍之介全集第四巻」筑摩書房
　1971（昭和46）年6月5日初版第1刷発行
　1979（昭和54）年4月10日初版第11刷発行
入力：土屋隆
校正：松永正敏
2007年6月26日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

詩集

芥川龍之介

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/